



ダイバーシティ（多様性） を活用する時代

調査理事 喜多泰代

最近の男女共同参画活動は、「ダイバーシティ（多様性）が組織の活力を上げる」という視点から取り組まれることが多くなった。対象を「性別・国籍などの属性、価値観や文化的背景などが異なる人々」とより広義にとらえると同時に、単に多様なものを取り入れるだけでなく、「多様な能力の活用を考慮することにより、個々のパフォーマンスを引き上げ、結果として組織全体のプラスを導く」ことがより強調されてきている。本来、あるべき姿に近づいてきたのだと思う。

「ダイバーシティ（多様性）」の導入は良い方向と考えられている。同質なタイプの人々だけが集まっていれば、意思の疎通は容易で団結しやすいが、その活動はどうしても定型になりがちであろう。これに対して、多種多様なタイプを活用しようとすれば、初期の混乱や効率の低下は起こるであろうが、それを乗り越えれば、より面白い結果が期待できそうである。新しい技術や概念の創出を目指す人々が集う学会には、ぜひ後者であってほしい。

アジアの人々との協調も「ダイバーシティ（多様性）」を増す、大きなチャンスである。現在、本学会の海外セクションは9セクションあり、海外会員数は1,800名強（平成19年3月末）と全体の約4.6%になっている。本学会英文論文誌掲載論文における、海外からの投稿論文の割合は40%を超えていると伺う。この現状は、海外セクション制度設立や論文誌査読期間の短縮など、先達の様々な御努力の賜物であろう。こうした結果、今、まさに、「異」を取り込むだけでなく、「異が持つ多様性を生かす」フェーズに来ているのではないだろうか。各国、それぞれ、興味のある分野、技術を取り巻く環境、その進展段階など様々な状況があるだろう。その多様性を尊重した形で交流を進め、新しいものを一緒に生み出していくイメージを大切にしたい。個々の多様性を生かすのであれば、当然、手段も多様な形態となるであろう。情報の交換、教育活動への協力、相補い合う技術の連携など、相手国や分野によって臨機応変に進められるとよい。実際に、研究会単位での機動性を生かしたアジアとの交流が数を増してきていると伺う。こうした活動のそれぞれの特性を尊重しつつ、かつ、情報を共有し全体としてどう生かすかを設計していくことが本部の一つの使命かと思う。

同時に、多様な会員の活力を上げるため、海外会員へのサービスも進化させていくべきであろう。現在、海外会員には、論文誌の電子的閲覧のみにサービスを限定することにより、会費負担を下げる配慮が行われている。このため、オプションとして学会誌購読されている方以外には学会誌の内容は伝わっていないが、日本の先端技術動向や技術解説などへの関心は高い。興味の高い記事を英訳し、Webを介して閲覧できるサービスを追加料金で提供できれば、多様な要求への対応に有効かもしれない。こうした手立てを考える際には、「伝える」ことにより、国内の会員にとっても同時にメリットとなる双方向性も考慮したい。また、知財の流出など負の側面に対する防止策も怠ることなく、多様性の活用を進めるべきであろう。

多彩な「異（なる考え方）」が集い、その個性をつぶすことなく新たな学術の流れを作ることこそ、学会が得意とし実践してきたところである。「ダイバーシティ（多様性）の活用」が重要視される時代、その実力を発揮し、現会員だけでは想像できない新しい学会の魅力を、多様な「異」を巻き込みながら生み出していけるとよいと思う。